

時論

中国は「相互補完性の罌」から脱却できるか

中国経済は、足元では工業生産の伸びが高まり、輸出もプラスの伸びに転じるなど、景気急減速のリスクは後退しつつあるが、なお下記のような問題が山積しており、中長期的な見通しでは慎重かつ悲観的なものが大勢となってきた。

喫緊の課題としてはシャドーバンキング問題への対応がある。差し当たっては、理財商品の中身と規模の実態把握、主な資金運用先である地方政府の債務の検査が必要だが、こうした問題を引き起こした本質的な原因にも目を向けなければなるまい。

すなわち、預金金利を人為的に低水準に抑えたことが高利回りを謳った大量の理財商品を生んだ経緯を考えると、預金金利自由化の加速、量的規制から金利政策への金融政策のレジームチェンジ、銀行のリスク管理能力の向上、預金保険制度の整備が求められる。地方政府がその財源確保と実績作りを目的に、収益性も必要性も乏しく、都市・農民間の格差是正にもつながらないインフラ投資や資金調達に傾斜しないように、地方政府の自主税財源を増やし、首長の評価制度を見直すことも必要であろう。

また近年、中国では余剰労働力が減少して賃金が上昇し、労働コストでは後発新興国に劣後し始めた（いわゆる「ルイス転換点」に到達）。今後は先進国の技術模倣とその大量生産に拠って立つ成長はできず、イノベーティブな企業をいかに生み出し、独自の技術革新力、製品開発力を高めていくかが重要なポイントとなる。

そのためには価格や市況をシグナルとして行動しない国有企業の整理とガバナンス改革、民間企業の参入分野の緩和・拡大は避けて通れない。リーマンショック後の4兆元の公共投資により「国進民退」となってしまった流れを変える必要がある。

投資偏重の成長パターンへの転換、過剰な生産設備の削減も待たない。40%を優に超える投資比率には持続可能性はない。強力な行政指導による生産設備削減が望まれるが、国有企業の改革も必須条件である。

こうした諸課題への取組がどのように展開していくか、改革・解決に向かうかどうかを見極めるに際し、個々の動向をつぶさに見ていくことはもちろん有用であるが、鳥瞰的かつロングスパンで見ると「相互補完性」という視点が欠かせないように思う。

「相互補完性」とは、一国の経済システムを形成する様々なサブシステム—雇用・企業間関係・金融システム・地方制度・財政制度・政府の役割など—が相互に依存し合い、強め合って存在している関係を示すものである。こうした関係がいったん成立すると、一つのサブシステムが単独・先行して変わることを他のサブシステムが阻止するので、個々のサブシステムはもちろん、経済システム全体も容易には変わらないし、変えることも困難となる。このことは、わが国で高度成

長期に確立した「長期雇用」「継続的企業取引」「間接金融優位」「国主導の規制と公共投資」といったサブシステムが、キャッチアップ型の成長が終焉した現在でも、しぶとく残存していることから想像できる。「相互補完性の罠」とでも称すべき現象である。

一方、「相互補完性」が存在することは、裏を返せば、サブシステムが前提としていた基本的条件が大きく変化すれば、強い変革圧力が発生して一部のサブシステムが変わり、それと相互依存関係が深いサブシステムも変わるといふ具合に、ドミノ倒しの如くに一気に改革が進む可能性がある。最もありうる基本的条件の変化は、規制改革や自由化によるグローバル競争環境の強まり、市場経済領域の拡大であろう。

今日の中国では、「共産党一党支配」「財政・金融機能の国家支配」「主要産業における国有企業の独占・優遇」「投資依存の成長戦略」「投資主体としての地方政府」等のサブシステムが強い「相互補完性」を持って存在しており、このことが「過剰投資・過剰生産能力」「地方政府の過剰かつ不透明な債務」「経済格差拡大」「公務員の汚職・腐敗」といった同国が抱える多くの諸問題を惹起していると言える。

中国は、「ルイス転換点」への対応という一種のグローバル競争圧力の高まりに直面している。これが国有企業の整理・縮小、市場経済領域の大幅拡大、さらには政治体制改革を迫るといふ展開も考えられなくもない。しかし、共産党一党独裁という絶対的命題を掲げる中央政府が、直ちに強い意志を持って現在のサブシステムの「相互補完性」を揺さぶるような変革圧力を与えようとも考えにくい。

中国は、サブシステム同士が牽制し合い、既得権益勢力の抵抗を受け、「相互補完性の罠」に陥って、産業構造の高度化、技術革新力や生産性の向上もままならず、現在の諸問題を引きずり続けるのか。それとも前政権より踏み込んだ改革に意欲を見せる李克強首相のリーダーシップの下、「相互補完性」が逆にバネとなるようなドミノ倒しの如き改革の道を歩み始めるのか、まさに分岐点に立っていると見えよう。

(調査部長 金木利公 Kaneki_Toshikimi@smtb.jp)